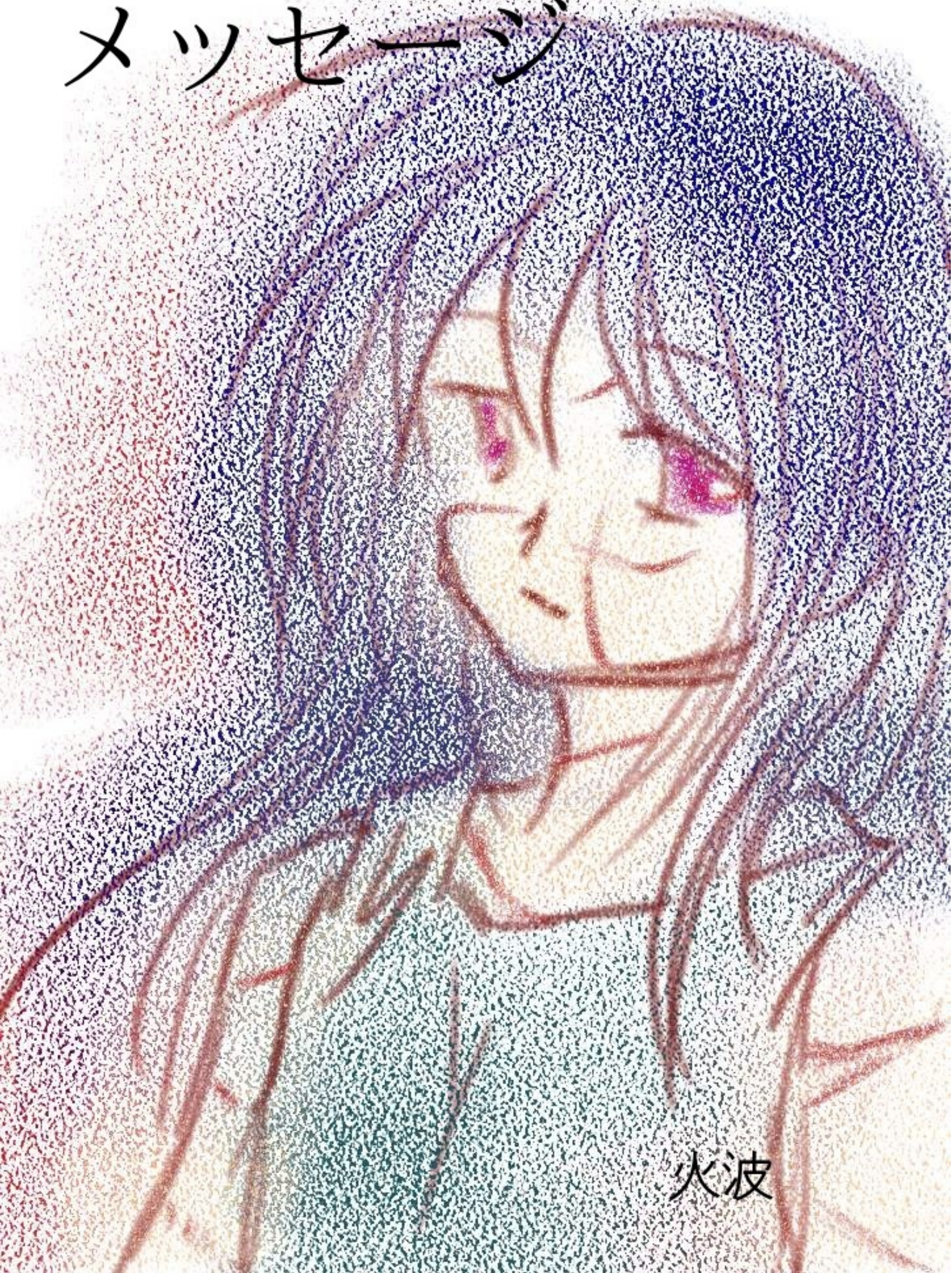


メツセージ



火波

『私』という存在

はじめに、この本の表紙を開いてくれた全ての人に感謝します。

ただ、自分の過去を見つめたいだけのエッセイというよりも独白なのですが、これを読んだ事でほんの少しでも何かを感じ取っていただければ幸いです。

この話は、実際に私が体験し、体感した事をまとめたものです。

小学校、中学校という小さな社会の囲いの中で、私が生きたことです。

ある人にとっては、波瀾万丈に見えるかもしれません。

ある人にとっては、なんてことのないことに見えるかもしれません。

でも、私は私だけの人生を歩んでいる事ですから、これが『普通』なのです。

ですから、『こんなのおかしい』といわれましても、こちらとしては困ってしまいます。

なので、このお話に存在する私は、どういった存在なのか、まず知ってもらいたいと思います。

『私』という存在がどういったものなのか、それが解ればあまりおかしいと思われなかつと思います。

簡単な自己紹介のようなものです。飽きないでついてきてくれる事を願います。

『私』という人物は、まず、『アスペルガー症候群』と呼ばれる少々厄介な症状を持っています。

とは言っても、全く私生活に問題のない程度の、ごく軽少のものですから、特別視はしてほしくありません。

アスペルガーというのは、最近になって少し世間の方にも知られるようになってきているらしいのですが、私自身もよくわかっていなかったりします。

特徴としては、様々なものが見られるのですが、今回は『私の場合』だけを告げていきます。

*『耳から聞いた情報の処理が他に比べて劣る』

たとえば、明日の予定や、日常会話など。何を言われたのかよくわからなかったり、どういう意味なのかと勝手に混乱したりします。

そのかわり、目から見た情報（文字や絵）は他に比べれば優秀なようです。それなりに、です。

*『忘れ物が酷い』

たとえば、ゴミ箱が5つあったとして、その全てにゴミ袋をセットする作業をしようとする。すると、5つのうちの3つまではできるのだが、あとの2つを忘れてしまう。など。

特殊といえば特殊な忘れ方でしょう？

食洗機に、洗剤を入れて蓋をするまではできるのに、スイッチを入れるのを忘れてしまう。など。

＊『同じ年の子とうまく同調できない』

これは説明が難しいのと同時に、自分もよく理解できていない事ですが。

大人の方や、小さな子たちなどとの会話などはそつなくこなせたりしても、同じ年の子とは趣味や興味関心が噛み合ずに、うまく同調できないんだとか。

不思議ですよ？ 自分でもそう思いますよ。

そしてこれは、学年別に仕分けされている学校では色濃く出てくる特徴の一つです。

＊『情緒の発達が遅い所がある』

なんていうか.....そのまんまです。

例えば反抗期、例えば思春期。そういった事が普通の人よりも遅く来たり、早熟だったりします。

恥じらいなども遅かったりするので、小さい時はいろいろと.....まあ、苦労します。

(暑いから脱ぐ。とかね。.....恥ずかしいのでこれ以上はいいませんが。)

いきなり考える事が老成してたりとか.....。私が、というよりは周囲が苦労すると思います。

以上が、だいたいのものでしょうか。

これら全てがアスペルガーのせいではありませんし、これら以外にもアスペルガーの症状と見られるものはあるそうです。

ですが、『アスペルガーだから』とか、そうじゃないからとか、そういう問題ではないと思います。

『他よりちょっと困ったさん』なんです。そう思っただけなのが一番かと。

そしてこれは、『私』が『私』であるという一つの『個性』だと思っています。

自閉症の一種だとか、いろいろといわれていますけど、私はこれが私なのだから仕方がない、と思っています。

かといって、それに甘えている訳ではありません。

忘れっぽいなら、メモを取るなり、普段からよく気をつける(確認する)など。

そういった努力をする事で、『克服』できるのですから、仕方がないと寄りかかるような事はしないようにしています。

それでも、仕方なかったりする事はありますけれど。ね。

情緒的な所なんかは、気をつけたくらいでどうにかなる問題でもないもので.....。

これはただ周囲の理解が必要なだけです。うん.....しょうがない。こればかりは。

日常会話の全てをメモする訳にもいきませんしね。

ですから、些細な事などはよく聞き返したりもします。ほんの少し辛抱してください。

とにかく、そういったよく解らないちょっと珍しい『個性』を持った人物が、『私』という人物だったのです。

そしてそれは、『私』自身もしばらく知る事のなかった『個性』でしたので、他の人にはよっぽど理解できない事だったかもしれません。

やっと次から本題に入れますね。思ったより長くなってしまっ、すみませんでした。

とりあえず、なんとなく『私』という人物が解っていただけかと思います。

これは、そんな私がぶちあたってしまった『学校のいじめ』の問題の話です。

それほど過激な事があった訳ではありませんが、何しろ鈍ってしまった感覚を持つ私がいうのは説得力がないのでしょうか……。

とりあえず過激な表現はできるだけ抑えますし、そんなにいうほど過激な事があった訳でもないので、斜に構えなくてもいいですよ。

読んでくださるという方は、どうぞ進んでください。

決して、読んでいて楽しいなんて事はないでしょうが、ほんの少しでも励みになればと思います

。

小学校という『社会』

なにかと、よくからかわれる存在だった。

それは、他の大勢の生徒のほとんどが同じ所から来た中で、一人だけ別の保育園から来たからかもしれない。

私の感性が、その頃から一風変わったものだったから、かもしれない。

『情緒的な所の成長が少し遅い所がある』

なんてことも、当時は私自身も知りしなかった事実だ。

小学生だったわたしたちに、『この子はちょっと成長が……』なんていわれた所で、理解できたかどうかといえば、それもまた曖昧なのだが。

まあ、そんなことを言われた事もなければ、そういうかばい方をした先生もいなかったのだから、実際そうなった所でどうなっていたかなんて解る訳もないのだが。

『特殊な子』なんてレッテルを貼られ、別の意味で囲いに入れられていたかもしれない。

そう考えたら、多少からかわれたって、『私』をしろとうする努力をしないうちにそんなレッテルを貼られることがなくてよかったのかもしれない。

小学校に上がった時は、周りに知っている人なんていなくて、すごく心細かったのを覚えている。

みんな小学校のすぐ近くにある保育園から来た人たちばかりなのに対し、私は家から遠い保育園に通っていたからだ。

同じ保育園から来た人なんて誰もいない中で、既に出来上がりつつあるグループの中に入っていき事もできなかった。

運良く話しかけられても、流行のモノを何一つ知らなくて、会話が全く弾まなかった。

教えられた所で、興味がないものはすぐに忘れていってしまう性質だったので、これもまた、相手にしてみれば不快感。

そのうえどっかねじが外れてる（というか、ようは間が抜けている）私は、何かとからかわれることが多くなった。

ぽーっとしていてちょっととろい。いじめる側にしてみれば、格好の的だった事だろう。

また、当時の私の一人称は、自分の名前に『ちゃん』をつけた、また今思い出しても恥ずかしいものだったのだが、そういった事もきっと大きく彼らの不快感をあおった事だろう。

そのうえ物忘れが酷いので何度言っても解らなかつたり、覚えたりできない私はあの年齢の子たちならば簡単に淘汰できた存在だったことだろう。

友達の手をひらを返すように変わって行って、いつの間にか一人である事が多くなった。

それだけならよかったのだが、いつの間にか『うざい』やら『消えろ』やらといわれるようにな

ったのだ。

人間、嫌な事はトラウマにでもならない限りけっこうすんなり忘れていくものだそうで、そうでなくても忘れる事が特技な私は、具体的にどんなことを何時言われ始めたかなんて事は覚えていない。

とにかく、脆かった友情なんて一年は持たなかったはずだ。

何かにつけて難くせを付けてきて、『うざい』やら『きもい』やら。

今思えばそのポキャブラリーの少なさに爆笑できただろうが、当時の私にしてみれば身に覚えのないことで何をそんなに言われなければならないのか疑問でしかなかった。

が、悪口というのは意味がなくても人を傷つけるもので、まだナイーブだった私は意味もなく傷ついていた。

小学校というのは、『校則』もあれば『秩序』もある、社会の中の小さな社会だ。

教える側と教えられる側が存在し、教える側だけの社会と、教えられる側の方だけでの社会も存在した。

『教えられる側』――すなわち生徒――の作り出す社会で、私という存在は淘汰された。

いじめる側も傍観者も、社会を作り出す存在であるのだが、淘汰された私にはその権利が与えられない。

社会を作り出す存在が、淘汰された存在を見下していいものと決めた。

だから私は、私の与り知らぬ所で見下される事が普通となったのだ。

影で聞こえる程度にこそこそと何かを呟く声。

はっきりと私に罵声を浴びせておきながら、素知らぬ顔をするもの。

いきなり背中を突かれる感覚。

白い目で見てくるくせに、視線のあわない顔。

何かと理由を付けて、仲間に入れてくれない人。

友達面して、人のあらいを探そうとしてくる者。

一方的に言葉を浴びせてくる、成り立たない会話。

どれもがちぐはぐで、気持ちの悪い世界だった。

けれど、だからといって、彼らを恨んだ事はない。

エスカレートしていても、机の落書きや、物の紛失など、あからさまな事はしない。

教えられる側の作り出された世界が、教える側の侵入により壊されるからだ。

物的証拠を残せば、それは明らかに不利であるという事を、幼いながらに彼らも知っていた。

一番酷くて、机がベランダに出されていた事くらいだ。

それでも、精神はおかされ続けるのが日常で、それが嫌で仮病を使う事もあった。

ずる休みしようとした事もあるが、それは親が許さなかった。

『いじめられていて、学校に行きたくない』なんて、いいたくなかった。

そうでなくても、私は宿題を出さない問題児だったので、宿題を忘れたことを理由に休むんじゃないと叱られていたから。

小学校3年生あたりまでは、日々が地獄だと思った。辛かった。

『くさい』『消えろ』『きもい』『死ね』は、もう彼らの私だけに通じる挨拶だった。

グループに分かれて授業する事も珍しくはなかったし、その度に私は一人でうつむいてぽつんと立ちすくむのだ。

先生に、グループに入りなさいなどといわれた所で、入った方も入られた方も不愉快ならばいっその事一人でやるとタンカをきった事もあった。

給食の当番になった時などはひととき地獄だと思った。

私のよそる食べ物は腐るらしいのでみんなが顔をしかめて取っていく。

実際どれも残さず食ってるあたり何とも疑問なのだが、食べ物が無駄にならないだけマシなのだろうか。

配膳をするとトレイごと全てが腐るらしいのでみんなが受け取ってくれない中、一人でクラス中をうろうろするはめになる。

でも、やっぱり配られれば食べるのだ。その辺りが不思議というか、その程度というか.....。

日直の時などは自分一人が仕事を抱えるだけですむので、別段問題はない。号令に従ってさえくれば。

全体的に、「そういう人たちもいるか.....」の程度で、深く傷つく事も取り返しのつかない事をしてしまう事もなかったのは、ひとえに、私が孤独ではなかったからであろう。

私を守った『盾』

私は、私が孤独でない場所を知っていた。
そして、その場所はいつだって無条件で私を受け入れてくれた。
それは時として、私の盾にも、矛にもなった。

それは、私の『家族』だった。

何とも不思議な事に、私たち一家は、どうにもいじめられ体質の者が多いらしく。
父も母も、母方の両親も、学校やら職場やらとそういった経験を持っていた。
始めの頃はなかなか言い出せなかった事や、抱え込みがちだった事も、両親はきちんと聞き出してくれた。

共働きで忙しかった両親は、疲れているだろうに、子供の悩みを飽く事なく真剣に聞いてくれた。

バカの一つ覚えのように、「可哀相な子なんだよ」とか、「無視すればいいのよ」とか、そんな事は決していわなかった。

主に相談は、父、母方の祖母といった具合だった。

母方の祖母は、すぐ隣の家に住んでいるから、気兼ねなく訪ねていった。

母にも相談した。が、母は忙しい人で、パソコン片手やテレビ横目なんて事があって以来、私が勝手に信用しなくなった時期があった。

父は論理的に冷静に物事を考える人で、母よりも忙しくなかった為、母よりも父に相談した事の方が多かったかもしれない。

感情移入されて、感情的になってしまう祖母や母より、父の方が落ち着いて話せたからというのも一つの理由だ。

父は、諭すようにいつも話をしてくれた。何時だって長くなるのだが、不快になんて思った事はない。

母は、自分の体験談もしてくれた。よく途中で感情的になるので、ついていくのが大変だった事もある。

祖母は、豪快に笑いながら話を聞いてくれた事もある。『漢』みたいな性格にあこがれた事もある。

彼らは、決して私に登校を強制しなかった。が、甘えは許さない人たちだった。

「学校行かなくてもいいよ。」というその口で「頑張りなさい。」というその状況に、当時は腑に落ちないような不満も持っていた。

そして、「何かあったら、必ず守ってあげるからね」と約束をしてくれていた。

その約束に、何度守られ、助けられたか知れない。一人一人の子供の心を守る事も、親であり、大人である自分たちの義務なのだ。と、教えてくれた。

いくら彼らのもとの泣いても、彼らは決して責めはしなかった。何時だって慰めてくれた。

暖かくて、柔らかい手で頭を撫でてくれた母親。

強くて、たくましい手で包んでくれた父親。

経験を持ち、知性にあふれた手で支えてくれた祖母。

彼らがいたから、私は道を踏み外せずにすんだのだと。

彼らがいたから、私は今私でいられるのだと。

今だって胸を張って、心の底から誇れる家族。

彼らが、私を守る盾になり、私に乗り越えるだけの知恵をくれた。

そして、過度に嫌がらせが酷かった時は、矛となって学校へ行ってくれた。

何があっても、絶対にここだけは大丈夫だという安心感が、私をまた学校に行くだけの力をくれた。

力を抜いてもいい場所がある。逃げてもいい場所がある。

それを知り、安心できるという事を実感できれば、人は前に進む事ができるのだ。

時にそれに甘えたり、寄りかかろうと思う事もあるけれど、その時は両親がさとしてくれる。

例えば、この『盾』は、家族じゃなくてもいいのかもしれない。

頼りになる『友達』が、たった一人いるだけでもいいのかもしれない。

それに寄りかかりすぎたり、甘えたりしない限り、彼らは安心を、居場所を与えてくれる。

そしてまた、その感謝や喜びを持って相手に接する事ができれば、自分はその人の居場所にだってなれる。

けれど、本当に孤独だったとき。

本当に、誰も理解してくれるものがないとき。

それはきっと、本当の苦痛であり、地獄なのであろう。

どうか、周りに目を向けて。主観だけで物事を見ないで。

『きっと』とか、『だろう』とか、そういった言葉は人を盲目にする。

真剣に、誰かにぶつかってみる勇気を持って。

本当の孤独だと知る事は、とてつもなく恐ろしいものかもしれない。

けれど、ふさぎ込んでばかりでは、あなたはあなたを助きたい人の手に気づけない。

この世に存在してはいけない人はいない。

たとえ今、あなたの周りに誰もいなくても。

あなたが周りに目を向け続ければ。辛くて苦しくて、悲しくなったとしても。

あなたが卑屈にならないで、相手と自分を理解するようにつとめれば。

絶対に、あなたの居場所になる人が現れる。それは絶対だと言える。

世界は広くて、壮大なのだから。孤独なんて事はない。

たとえ今がそうだとしても。

その苦痛は、必ず終わるから。

自分なりの『抵抗』

何時頃だっただろうか。まだ、小学生だったうちのことだ。
高学年に上がった頃には、身に付いていた私の武器。
それはまぎれもなく、私の家族が与えてくれたものだった。

私は、『笑う』ことを覚えたのだ。
ああ、勘違いはしないで。『嘲笑う』のではなく、『笑う』のだ。

いじめは嫌だった。心底嫌だ。
でも、いじめをした人を憎む事はできなかった。
彼らは彼らで、追いつめられるだけの何かがある訳で。
彼らは、彼らの友達の前では、まるで普通の子供だったから。

多少の言葉遣いや、品なんかは目につくものがある子供がいても、彼らは基本的に『悪いヤツ』
ではないのだ。
誰に対しても攻撃的だったりする訳じゃなくて、友達という時は優しくもできる。
心がない機械じゃない。戦で人を殺す悪魔じゃない。
彼らは、私の痛みを知らないだけで、私と同じ人間である。
そう思い始めたら、何とも憎みにくくなってしまった。

だが、それと私がいじめられる事に関しては全く結びつかないし、納得がいかない。
ストレスやら何やらがあるならば、こんな気持ち悪くなるような方法じゃない別の事を考えれば
いいのに。
そう思った所で、その思いが彼らに伝わる事もない。

彼らは憎まない。けれど、彼らのしている事を私一人が受け止める義理もない。
だから、徹底的に抵抗してやる事にした。
そもそも血気盛んな祖母の血が入った私は、単純で好戦的な人間だ。
彼らの境遇がいかに辛かろうと、私は同情するに留まる。
そこで彼らが私にする避難や罵倒を片手でいなせるほど、私は大人ではない。
彼らのする事が私の『人権』を奪うモノならば、徹底的につぶしていく。
それがどれほど辛く、苦しい道になろうとも。

そう考えられたのも、本当に折れそうになったときには、支えてくれる家族がいると知っている
からだ。

私は私なりの方法で、彼らに強く抵抗する事を選んだ。
そして家族は、それに精一杯答えてくれた。

暴力で抵抗した事もあった。
口で言い負かそうと思った事もあった。

暴力は、数の問題で大いに不利だった。
そして、いくら言葉の暴力を受けたと言っても、実害を出したのが自分の方であるならば、不利になるのも自分の方なのだ。
先生は、その事を解ってくれない事の方が多い。
『手を出したら負け』というのは、何処の世界にもあるルールだ。
口は、そもそも聞く耳を持たない相手に、『会話する』なんて芸当ができるはずもなかった。
徹底的につぶそうとした結果、徹底的につぶされてしまった。

一般的によく言われている解決方法に、『無視』がある。
一時期それも試してみた。
すると不思議な事に、自分の今まで意識していなかった事まで頭に入ってきて、それはそれですごく精神的に負担がかかった。
私が無視した所で、相手は私の存在を無視してはくれないのだ。
私などいない存在だ、とでも言うように振る舞いながらも、彼らの中にはちゃんと『私』というターゲットが存在している。
無視と無視で無関係。なんて、そんな事は起こりえなかった。

あらかたいろんな事を試し終わり、いじめに抵抗するって案外難しいもんだと考えた頃。
タイトルを忘れてしまったが、少し古い外国の映画をみた。
医者のお話で、患者を『笑わせる』というものだ。
実在する人物の実体験をもとに作られたもの。
有名なものらしく、高校に入って英語の教科書でその存在を発見した時は驚いた。
.....、いや、中学だったかもしれない....。

その映画をみて、患者を笑わせようとしているその医者は、ひどく滑稽で、でも立派な道化だった。
その滑稽な動きや顔つき、仕草が患者に笑いを与え、自らの喜びとなっている。

私は笑う事を覚えた。
楽しければ笑う。笑えれば楽しくなれる。

それに、私が笑った所で不快になる人間なんていない。
いじめっ子にしてみれば、「なんだこいつ」って具合だろうが。
笑える事は、強さだと信じた。

何を言われても、何をされても。許しがたい事をされても。
私が私である事、それを侵されない限りは。
にこにここと笑っていればいい。

わざと道化になって、わざと滑稽になって。
その辛くて悲しい顔は、笑顔の仮面を被ればいい。
何度その笑顔が歪んだか知れない。
何度その仮面が崩れたか知れない。
でも、笑い続ける事。

それが、自分にできる一番平和で無理のない、最大級の抵抗だった。

無視をする、とか、相手にしない、というのは、解決方法ではない。
こちらが相手は無視した所で、相手がつまらなくなっていて興味を失うという事は少ない。
どうにかして反応させてやろうと、むしろ躍起になる事の方が多い。
相手にしないのも、それとほぼ同じだ。
相手の方は躍起になって（つけあがって、とも言う）、ちょっかいを出してくる。

相手にするからつけあがる、と思われるかもしれない。
けれど、自分の方が相手は無視する状況というのは、精神的に疲労する事がある。
相手は多数。だから、一人を無視した所で、特別精神的に疲弊する事はない。
が、こちらはほぼ常に一人きりの状況で、無視を貫くというのは並ならぬ努力が必要になってくる。

『笑う』が生み出した事

笑う事を覚えた私は、何か言われるたびに爆笑してやった。

通りがかりで『きもい』とか『うわっ、ブス!』とかいわれても、にこにこしながら「そうね〜」って答えていなしていく。

教室で男子の真っ向からの罵倒勝負には、爆笑してやる。

どこかでの子のひそひそ声には「はっはっはっ」と聞こえよがしに笑ってみる。

私に触ると腐るらしく、私に豪快に体当たりをかましておいて、「腐る〜」とか言われれば「腐れ〜」って笑ってやる。

ことごとく笑ってあげる事にした。

笑うというのは、自分の中にゆとりを作るらしい。

笑って過ごすうちに、彼らの罵倒は非常に解りやすいパターンだということが解るようになってくる。

彼らが私に与えてくる罵倒は両手で事足りてしまうほどの量しかない。

(種類の) 数だけで考えれば、一日に片手で足りてしまう事もある。

それに気づいたときは、家で腹を抱えて笑ってしまった。

少なくとも私自身に浴びせられる言葉は、

『きもい』『うざい』『ブス(ぶさいく、ともいう)』『消えろ』『死ね』『くさい』『腐る』の程度なのだ。

ボキャブラリーの少なさに気づいた時は、言われるたびに本当に吹き出して笑ってしまう。

何、一々まじめに相手してあげる必要なんてない。

笑いたいときに腹を抱えて笑えばいい。

「それしか言えんのか！ 貴様らは！」

机を叩いて大笑いしてやれば、彼らも少しはっとしたような顔をした。

彼らは、彼ら自身が言われたら嫌な事をねちねちと突きつけてくる。

やり場のない怒りを、ただ思いつく限りの言葉にのせるのだ。

解りやすくて、子供っぽくて。(いや、実際子供だが.....)

いっその事こっちが卓越してしまえば微笑ましい事この上ない。

まあ、微笑ましいというにはあまりにも過激すぎる気がするが。

笑うというの、沢山の種類がある。

嘲笑。苦笑。微笑。失笑。爆笑。脳足りんなのでこれくらいしか出てこない.....。

笑いの種類は、きちんと気をつけて使い分けないとダメだ。

嘲笑や失笑なんてしたら、彼らは自分をバカにされたと自尊心を傷つける。

そうすると嫌がらせの方もかーくエスカレートしてくる。

ほんの少し笑うくらいでは、こちらの気が収まらないし、苦笑した所で、気分は晴れない。

相手を刺激しないようにと笑わなければならない。

自分に被害がないように笑い方をちょっと工夫するだけなら、特別辛い事もないだろう。

笑いの中には、『私はあなたに無害です。』というメッセージを込める。

それと、『あなたのその攻撃は私にとって無意味です。』というメッセージも。

それに気づける相手はそうそういやしないのだが、『あなたは馬鹿ですか』と捉えられてしまわれぬように気をつければいい。

「何笑ってるんだ、こいつ。」

顔を歪めて立ち去る人たちのほとんどが、不愉快だという感情を剥き出しにしていた。

けれど、そのひとたちからの嫌がらせがエスカレートした事はないのだ。

とりあえず、私としたら、『成功した』という事だろうか。

自分の中にゆとりが生まれ、相手を上手くいなせるようになったのだから。

そして相手も、ほんの一部は、まるで軽口のように『ばーか』と言う程度に終わる者も増えた。

『笑う』ことは、自分にもゆとりができるが、相手にもゆとりが生まれるらしい。

言葉だけを聞けば重くなってしまう事も、本心ではないと解ってしまうほど軽く投げられる事が増えた。

それでも応える事がないとは言い切れないが、よほど軽くなったのは事実だった。

初めての『涙』

もちろん、全てが無傷でいられた訳ではなかった。

基本的には『無視』やら『陰口』の域を脱しなかったが、中にはそれだけで気のすむ事もないらしく。

初めて、嫌がらせが表面化したのは、何時だっただろうか。

それが小学生のときだったのか、中学生のときだったのか。

それさえも大分曖昧だけど、された事だけははっきりと覚えていた。

トイレでの事だった。

実はトイレでそういった事をされたのは2回ほどあるので、どっちがどっちだったか曖昧になるのだが...

小学校の 때가、初めてだった。

トイレに入って。

トイレットペーパーがなかったのだ。

確認してからは入れよ、という話だったのだが。

たまたま、外に人がいて。

何時だって友達の皮を被っているだけの子と、心優しい友達がいて。

その二人に、紙を頼んだ。

すると、濡れて使い物にならない紙ばかりをよこしたのだ。

くすりと笑う声と、水道の蛇口をひねる音がしたのだ。

明らかに、濡らしてから渡してくるのだ。

しまいにはそれを指摘すると、言い訳にもならないような言葉を並べて、結局トイレを出て行ってしまふのだ。

放課後で、人はもう来ない時間帯だった。

季節は冬で、寒かった。

いつまでもそうしている訳にも行かず、結局拭かずに出る事にした。

このときで既に半泣きだったが（何せ友達だと思っていた子に裏切られたのだから）、個室の扉を開けて驚いた。

トイレを出て行ったはずの二人と、いつも私をからかっていた子たち数人が、そこにいたのだ。

ニヤニヤと笑いながら、目が合った瞬間軽く悲鳴を上げた。

『うわあ!! 拭かずに出てきたの!? 汚い!!』

指を指して、蔑むように叫んだ。

他の友達も口々に非難した。

どうすればよかったというのか。

頭が真っ白になって、何も言えなくなった。

笑うようにしてトイレを出て行ったその子たちの顔を、今でも覚えている。

悔しくて悔しくて、ぽろぽろと泣いた。

止める事もできずに、泣く事しかできなかった。

先生に、そんな事は言えない。

結局その日は、泣きながら帰り、親にも話せないまま寝た。

初めて、本当に悔しくて泣いた日だった。

それから、中学の時。

セイフクが、まだ新しかったときだ。

トイレの掃除で、便器の掃除を頼まれて。

まあ、いつもの事だったから、引き受けた。

特別嫌だとも思わなかったから、というのもあるが。

便器を洗うとき、扉が開いていると洗いづらいのだ。

扉が内側に開くので、足に引っかかるから。

戸を閉めて、鍵を閉めて。

そうやって個室の三番目を洗うときだった。

急に、降ってきたのだ。

トイレットペーパーの紙と、乾いたり濡れたりした雑巾。

それと、大量の水と沢山の笑い声。

幸い水は頭から被るような事にはならなかったが、制服が重くなるほど濡れた。

反射的に逃げるように個室から出れば、爆笑の渦。

掃除していない他の女子たちが、笑いながらやはり逃げるように帰っていく。

片付ける気も起きなくて、その日はそのまま帰った。

秋の肌寒い日だった。でも、幸い私は他の人より寒いと感じる気温が低い子だったので、寒いと感じる間もなく制服は乾いた。

他人事のように笑いながら、その日あった事を親に話すのが習慣だった。

本当に腹から笑ってしまうような事もあれば、笑わなければやっていけないような事もあった。

他人事のように話さなければ折れてしまいそうで、かといって吐き出さなければ押しつぶされそうになってしまっただけ。

そうして語るのが、一種のストレス発散だった。

いくら明るく話したとはいえ、今思えば不愉快な話でしかなかっただろう。

両親はそれでも、嫌な顔せず、『がんばったね』といてきてくれた。

その日も、そのトイレの事を話したのだ。

が、涙が止まらなくなってしまった。

止まらなくなるほどの涙を流しながら親にすがったのは、初めてだったように思う。

妹たちまで『大丈夫？』と心配させてしまう自分が情けなかった。

が、耐えられなかったのも事実だ。

それを悪いなんて一つも言わず、親は全てを受け止めてくれた。

どうやったって苦しくて、泣きたくなくなってしまうときはあります。

そんなときは、いっそのこと我慢せずに泣けばいいのですよ。

自分の中のプライドは、そんな事では折れないでしょう？

涙を見せたら負け、なんて。

そんなの無理ですよ。

人間、ですから。

嫌なものは嫌ですし、泣きたいときは泣いてしまっても。

本当に泣けなくなったときほど、苦しい時はないでしょう。

誰にも見られたくないのなら、こっそりと一人で膝を抱えて。

誰かにいてほしいなら、遠慮なんかしないで甘えて。

泣きすぎる事は、『負け』じゃない。

次に『勝つ』ための準備運動です。

あなたが泣いたからって、責める人はいません。

もしそれを責める人がいたら、それは責めている人が悪いのです。

泣かない強さも必要ですが、泣ける強さも必要ですよ。

『世界』

私の生きてきた、ほんの一部の話。
思い出せる限りを引っ張りだして、その中でいくつかに絞り出した話。
なるべく具体的に思い出せるものを並べて。

これが、私が生きてきた世界の一部です。

本当は、もっと辛いと思ったときもありました。
本当は、もっと楽しいと思えた時期もありました。
けれど、全ては語れません。
記憶が曖昧だということも間違いではないです。
自分のトラウマを呼び起こす事になりそうで怖いのも事実です。

ただ、ほんの一部の話で。
私の伝えたいメッセージだけを添えて。

他にどんな事があったかなんて、知っても楽しくはないでしょう？
自分の傷をえぐるのも、これ以上あなたを不愉快にさせるのも、何一つ、いい事なんてないですからね。

そして、最後に少し、メッセージを。

人が生まれ、生きる以上、必ず死が訪れるように。
時代がうねり、栄え、衰えていくように。
今辛いと思う事は、永遠ではない。

9年という長い時間を、私はほとんど、楽しめずに生きてきた。
けれど、それが『不幸』だなんて思わない。
私は人の『痛み』を知れるようになったし、『絆』の強さを感じる事ができた。
それは貴重な事だし、私の中で生き続ける以上、無駄になる事はない。

あの9年があるから、今の『私』はここにいて。
あの9年があるから、『私』は『私』でいられる。

不幸だと思った事も、苦しくなった事もあった。
自分ばかりが、と、悲観した事もあった。

けれど、今。私はとても『幸せ』です。

心から信じあえる『友』に出会い、力強い『家族』がいる。

私はこの世界に、孤独ではない。

だから、あなたがもし孤独だと感じてても。
あなたは孤独ではないから。

あなたがもし、孤独を見つけたら。
孤独にとらわれる人を見つけたら。
あなたにだって、救う事ができるはず。

そうやって手を取り合えば。
世界はもっと、明るく見えるから。

くじけないで。
どうか。

自分をもっと大切に、思えますように。
そしてその痛みを、強さに変えられますように。